



セ ン タ ー 長 報 告

半年の活動を振り返って

2017年度上半期(4-9月)の活動

CISMOR、日本ムスリム協会、RABITA(世界イスラーム連盟)の共催で、国際シンポジウム「世界平和と共通イメージ」が開催された。午前、午後のセッションではアラビア語、英語での発表があり、間に基調講演が行われた。徳増日本ムスリム協会会長、サミール博士、筆者(四戸)、チャオ博士(元台湾駐サウジ大使)がアラビア語で、中西教授(GS)が英語で各々発表を行った。日本でアラビア語が発表の共通言語となる学術会議の時代になったのは73年の第四次中東戦争前後から石油資源国有化に伴う原油収入増大を背景に世界各地から留学生を無償で受け入れた成果で、流れは現在もおお続き、アラビア語に堪能な非アラブ圏の宗教指導者、研究者たちがアジア圏でのイスラーム会議でアラビア語を国際共通語として使うようになっている。中西教授の“Human Security, Human Dignity and the Middle East: Searching for Peaceful Cohabitation”は中東の民主化問題に関するもので、アラブの若い世代の知識人が共有するテーマである。

また講演会「エルサレムのイメージ:古代の視座と永遠の課題」デイビッド・サトラン(ヘブライ大学比較宗教学科学科長)と、GSとの共催ワークショップ「イラン・アメリカ関係と湾岸政治」アルシン・アディーブ・モガッダム(ロンドン大学SOAS政治国際研究学部教授、イラン研究所所長)が5月、7月に夫々開催されたが、トランプ大統領のエルサレム首都化発言やイランの核合意の政治的偏見に囚われない受け取り方を教示するものであった。

一方、上半期CISMORセミナーは例年よりも学術的に深く掘り下げたものであった。4月のスティグ・リンドバーク京都大学助教授の「賀川豊彦の宗教概念-宗教と科学の双方関係を中心に-」、5月のギャビン・ジェームス・キャンベルGS研究科教授「トランプ大統領のアメリカと保守的キリスト教」は各々、賀川豊彦研究、米国の現状を文献、歴史資料に基づいて分析したもので、多数の参加者があり、テーマを解明しようとする質問がなされた。

今年度、CISMORの研究力補強の一環として設置されたイスラーム学研究会が6月、7月と2回開催された。校祖新島襄が卒業したアーモスト大学のターリク・ジャファー准教授による「ラーズイーのイスラーム神学における役割について」は、ガザリーに偏っている日本のイスラーム学研究者にとっては学問的刺激を促すものである。ラーズイーはイスラーム圏神学生にとっては神の啓示を信仰と理性のより良いバランスで理解する道を開いた学者である。イスラームの啓示は人間の言葉を通じてなされたのだから、言語的、理性的に理解することから始まるのがイスラーム神学の正道である。7月の「ハラールとハラームについて」、「ハラールビジネスの現状」では、前者のイスラーム法学の基本概念の説明を筆者が、後者を阿部CISMOR特別研究員が行った。ハラール産業は現在注目を集めている分野である。そしてCISMOR特別研究員の学術研究成果を一般に提供することができた。今後も継続拡大していきたい分野である。

また、CISMORとの関係が深いオマーン宗教省からアブドルラフマン・アル・サリミー博士が訪問された。アブドラ・サリミー宗教相の甥で、同省国際関係の責任者である。東大でのオマーン・イバード派会議に2人とも来日された。小原前センター長、サミール元教授、筆者がオマーンで宗教相のご自宅を訪問したが、その際には倫理の分野での宗教の違いを超えた共通性を主張された。今回、宗教相とも東京で会ったが、宗教間対話活動(成果翻訳出版)の熱心さに変わりはない。

また5月に、英国Brunel大学で学位を取得された永田正樹さんが訪問された。英国でのイスラーム研究が、英訳された文献翻訳資料が古典を含めて豊富なことからアラビア語が不要なこと、同時に古くからの活動なので、昔の訳は古典英語と同じであることなどの情報を得た。2001年から米国の中東コミットメントが始まり、それに伴い欧米のイスラーム、アラビア語研究が活発化し、成果が蓄積され、それ以前とは様変わりしているのが現状である。

(一神教学際研究センター長 四戸潤弥)



公開講演会
シンポジウム
研究会
報告

第10回 CISMOR セミナー

Toyohiko Kagawa's Concept of Religion: With a Focus on the Relationship between Religion & Science

(賀川豊彦の宗教概念 — 宗教と科学の双方関係を中心に —)

主催：同志社大学一神教学際研究センター (CISMOR)

【講師】 Stig Lindberg

(京都大学大学院文学研究科応用哲学・倫理学教育研究センター助教)

【日時】 2017年4月25日(火) 15:00-16:30

【会場】 同志社大学今出川キャンパス クラーク記念館 CL25 教室

賀川は色々な意味で時代を先駆けた思想家および運動家だった。東洋人でありながら、西洋の宗教・哲学・科学に親しみ、その東西の交差点に独自の宇宙観を編み出した。賀川は、物質世界を深く突き詰めた形而上学哲学者、あるいは特殊な現代自然神学者だったと言える。

賀川の宗教概念には3つの主題があった。すなわち、「宗教と科学は異なる認識論的領域であるが、相補的な関係にあること」、「宗教は本質的に進化的であること」、そして、「(賀川が主張する)進化的宗教は、パウロが主張する『キリストの姿へと成長していく』という神学と本質的に同じであること」である。この3つの主題について、Lindberg氏は、「賀川の世界観」「賀川にとっての宗教」「自己意識への批判精神」「宗教と科学」「信仰対事実」「宗教の進化」「現代の神学への適用」などのサブテーマを提示した。その幾つかを紹介する。

まず、「賀川の世界観」について。賀川によれば、現象界は物質とともに始まり、後に意識が発展する生命へと展開する。物質は具現した神の自己表現であり、それゆえ相対的に、創世記の「無からの創造」にあるような「他者」では無い。神性におけるその起源の故、物質はその源に(再び)つながることを欲する。しかし、その劣等な地位の故に、現象界(「創造物」)は神格的なとりなしを必要とする。この介在が宗教であり、イエス・キリストにおいて具現化される。

次に「賀川にとっての宗教」について。賀川の宗教理解は様々に表現されるが、おそらく、その最も根本的な表現は、超越や全体性に対する意識(認知)への人間の反応である。それは、それぞれ個人がより大きな実在／計画の一部であるという意識であり、細胞がそれ自身生命を持ちながら器官を形成する、あるいは、より大きな目的に仕えるようなものである。賀川はこの意識を「連帯責任」と呼び、イエスが歴史上におけるその初めての人として理解され、人間における発展した意識の頂点として同定されると主張した。宗教は永遠につながる時間と、無限に広がる空間と、それに充

満する生命の問題から割り出される単なる安全の道ではない。それは、冒険的な十字架を選ぶものであり、人間と人間との単に表面的な関係だけではなく、ただ一人である時にも、宇宙全体に対する責任から彼の生活を決定し、宇宙意志に添わんとする大きな努力を必要とするものである。つまり宗教は道徳よりも根本的なものであり、それは生活全体の焦点をなすものである。

「自己意識への批判精神」について。何故、自己意識が賀川と彼の宗教理解にとってそれほどまでに重要だったのか。それは、神を思い描き、解釈するのが自己だからであり、それゆえ、自己を理解することは誤った、そして有害な神理解から自らを解放する最初の一步だからである。賀川は、社会における科学の卓越、社会の価値に寄与するその力を認め、それに伴う宗教の周辺化を嘆いた。彼は、宗教とはそれ自体生命であり、それを科学から分離しようとするのは馬鹿げていると主張した。宗教は価値の創造、評価、保存、そして修復の運動である。

最後に「宗教と科学」における相補性について。科学とは神を見出す特に有用な手段である。しかしながら、我々が神の徴を捜し求めるための科学の利用以前でさえも、神は我々を知り、我々の良心を通じてコミュニケーションしている。宗教は、宗教を浄化し、それを聖なる芸術へと変える科学に対して、ある責任を持っている。逆に言えば、宗教は科学に、人間の主観性におけるその源を想起させる役割を持っている。宗教と科学は分け隔てられた領域では無く、我々の生活に実体を与えるために協働している。科学は生命の外的領域と宇宙の構造を探究するが、宗教は生命の内的領域と、それがどのようにして発展していくかを探究するのである。

賀川豊彦に関する上記のようなLindberg氏の発題に対し、活発な質疑応答が行われた。

(CISMOR 特別研究員 北村徹)



Stig Lindberg 氏

Conservative Christians in Donald Trump's America

(トランプ大統領のアメリカと保守的キリスト教)

主催：同志社大学一神教学際研究センター (CISMOR)

【講師】 Gavin James Campbell
(同志社大学グローバル・スタディーズ研究科教授)

【日時】 2017年5月25日(木) 17:00-18:30

【会場】 同志社大学今出川キャンパス 良心館 RY410 教室

Campbell 教授は「米国の福音派の人々がトランプ大統領を応援した。その支持率は81%で、それはジョージ・W・ブッシュやB・クリントン等よりも多い数値であった。」との報道に対し、「何故福音派の81%が応援したのか？」との問題設定を行った。

「米国の福音派にもコミュニティ毎に様々な動きがあり、一様ではない」ことに触れ、その一様でない有り様を、米国の福音派の中の各派を紹介と、米国福音派共通の合意点、および派毎・州毎の相違点について統計グラフデータを通じて明らかにした。

また米国の福音派においては、熱烈なトランプ氏支持勢力がいると同時に、支持しない勢力も歴然と存在していると指摘した。

基礎的研究の立場から、米国福音派の基本的理念および心情、米国福音派主流勢力を紹介し、彼らがトランプ支持勢力でない結論づけた。

出席者からの主な質問は次の様なものであった。

①「受けた教育のレベル(例：大学既卒者(高等教育を受けた人達)と大学に入学していない人達(然程教育を受けていない人達))による人々の支持の違いはあるか？」

②「他国への人的援助等といった政府支援を減らそうとするトランプ氏の政策方針は、クロスナショナルな支援の志向にある他国を含めた各国福音派の潮流と合致していないのでは？」

③「福音派の中でも多様性がある、と聞いていたが、多様性はオバマ大統領の頃から既にあったのではないか？(例：“Religio-

us Left (宗教左派)、“Liberal Evangelicals (リベラルな福音派)”、等)」

④「結果的に、25%である米国福音派の81%が投票したから勝ったと思うが、そういう意味では、“白人の福音派がトランプ氏を勝たせた”と言えるのではないか？」

⑤「米国の福音派は、中絶や同性愛の問題よりも地球規模の問題のほうが重要だと考えていた筈だが、何故、今回の選挙の時は、地球規模の問題よりも中絶や同性愛の問題が重要だと考えたのか？」

⑥「次の選挙の時までに福音派の構成比に変化が起きた場合(例えば、80%→50%に減った場合等)、次の大統領選挙は変化が起きると予想されるのか？それとも今回と同じ結果になると予想されるのか？」

⑦「もし、トランプ氏が“The Johnson Amendment (米国の税に関する規定)”によって福音派グループを支援したらどうなるか？或いは今現在それらを防ごうとする動きはあるのか？」

⑧「そもそも、“福音派”の明確な定義は何か？」

Campbell 教授は、紹介データの再説明、福音派の立場を示す新約聖書の各福音書内の数節を引用して答えた。また自身の担当予定科目「アメリカ史における宗教 (American Society and Religion)」(本学神学部、2017年度秋学期)で、継続的に分析し、明らかにしていくと述べた。

(CISMOR 特別研究員 阿部泰士)



Gavin James Campbell 氏

第1回イスラーム学研究会

Fakhr al-Din al-Razi's Role in the Islamic Intellectual Tradition

(ラーズィーのイスラーム神学における役割について)

主催：同志社大学一神教学際研究センター (CISMOR)

【講師】 Tariq Jaffer

(アーモスト大学宗教学科准教授)

【日時】 2017年6月16日(金) 15:00-16:30

【会場】 同志社大学今出川キャンパス 良心館 RY434 教室



Tariq Jaffer 氏

講義の前半で、Jaffer 氏は、イランに生まれたイスラーム伝統学の傑出した学者、ファフルッディーン・ラーズィー（1210年没）について紹介した。彼はその人生の大半を、知識を求めて中央アジアを旅した。Jaffer 氏は、ラーズィーの生涯と旅に関して、彼が行った、ムウタジラ派、マートウリーディー派、カッラーム派など、中央アジアの多様な知的潮流の代表的学派たちとの学問的論争について概述した。Jaffer 氏はさらに、ラーズィーの知的教養について、彼が理性的な知識（哲学や科学など）と、伝統的な知識（クルアーン・タフシール・法・神学・スーフィズム / イスラーム文明における神秘主義）とを、統合的に自己のものとしていたことを説明した。それから Jaffer 氏は、ラーズィーの知的教養の大枠を示し、理性と伝統に基づく知識を、彼がクルアーン解釈書の執筆の中で組織化、体系化した方法論について述べた。そして、ラーズィーのクルアーン解釈における学問的方法論と体系化が、イスラームの知的伝統での注目すべき革新であり、クルアーン解釈におけるムスリムの学問的方法論を一変させる知的作業であったと説明した。Jaffer 氏はこの点を強調しつつ、クルアーンの解釈に関して、ラーズィーの学問的方法論と、先達のクルアーン解釈学者たち、特にタバリーとザマフシャリー（彼はラーズィーに多大な影響を与えた）とを比較した。タバリーがクルアーン解釈を、主に預言者の伝承（ハディース）を通じて行ったのに対し（彼はその生涯をハディースの収集と研究に費やした）、ザマフシャリーはクルアーン解釈を、「人間理性の論理性 (implications of human reasons)」と調和させることを目指した。ラーズィーはこれら双方の学問的方法論を継承したが、イスラーム哲学者のヘレニズム的な世界観を、ムウタジラ派神学の成果と調和させることによって、更にクルアーン解釈学を前進させた。その結果、彼はスンニー派神学の学問的世界観の基礎を変えたのだった。

講義の後半で Jaffer 氏は、ラーズィーの『死の床での神への悔悛 (Testament)』、あるいは『最後の意思表示 (Last Will)』について論じた。彼は、当該論考からクルアーンに対するラーズィーの立場、敬虔さ、そして合理的思考に基づいたイスラームの伝

統学に関する彼の著作の目的を読み取ることができると主張した。Jaffer 氏は、ラーズィーの『死の床での神への悔悛』、あるいは「最後の信仰告白 (death-bed repentance)」がイスラーム文献資料として保存されてきたこと、中世イスラーム時代で解釈されたこと、さらに西洋の学者たちも解釈を試みたことなどを様々な点から説明した。彼は、合理的思惟に基づいたイスラーム伝統学の学者（ラーズィーもその一人だが）が死の床で神への悔悛に至るというテーマが、イスラーム教徒の学者たちの間で繰り返し論議されてきたことを説明した。ラーズィーの死の床での神への悔悛の論考は、合理主義の学者たちに対するイスラームの伝統学者たちの偏見を解消させるものだった。Jaffer 氏はまた、偉大なイスラーム伝統学者であるイブン・タイミーヤが、ラーズィーの敬虔さと彼の著作の目的をめぐる、先行する学者たちの当該論考を踏まえて、新たに解釈を試みたことを説明した。イブン・タイミーヤはラーズィーの異端的立場（合理主義に基づく伝統学）の当該論考を検証したが、その際に、イスラーム伝統学の従来の方法論を用いた。イブン・タイミーヤはラーズィーの死の床での神への悔悛論の解釈を通じて、ラーズィー自身が合理主義への厳格な固執に偏ることは、好ましいイスラーム的人格と両立しないと考えていたと指摘した。Jaffer 氏は当該論考から、ラーズィーが合理主義と、クルアーンとスンナを厳密に遵守することとが完全に両立し得ると考えていたことを意味すると解釈できることを指摘した。Jaffer 氏は最後に、クルアーンの解釈書におけるラーズィーの貢献と役割とは、人間の理性を通して到達した結論が、クルアーンの内容とどのように調和し得るかを示すことだったと結論した。

(CISMOR 特別研究員 北村徹)

① ハラルとハラームについて ② ハラルビジネスの現状

主催： 同志社大学一神教学際研究センター（CISMOR）

【講師】 ① 四戸潤弥

（同志社大学神学部・神学研究科教授、一神教学際研究センター長）

② 阿部泰士

（同志社大学一神教学際研究センター特別研究員）

【日時】 2017年7月18日（火） 15:00-16:30

【会場】 同志社大学今出川キャンパス 神学館 G31 教室

まず、四戸氏から発表がなされた。ハラールは「神が禁じなかったこと」、ハラームは「神が禁じたこと」を意味する。原則としてハラールがあり、その中にハラームの規定が存在している構造である。両者の根拠は『クルアーン』である。ハラームの語法を『クルアーン』に求めれば、メッカのカアバ神殿などの「聖所」、また、豚肉の食の禁止、禁酒などの「飲食規定」、売買取引における利息、聖なる月の「行動規定」、捧げ物など「儀式規定」があるが、それらに共通しているのは、その領域と時間において人は禁を犯してはいけないということである。ハラームとハラールは『クルアーン』に明記されているので明らかであるが、実際の適用については必ずしも明瞭ではなく、それを「判断（ファトワ）」することが法学者の伝統的な役割である。

現代において、ハラールとハラーム概念が一般信徒レベルで膾炙されるに至った契機は、ユセフ・カルダーウィーの『イスラームのハラールとハラーム』（エジプト、1960年）の出版である。初版によれば、これはアズハル大学（エジプト）の要請で書かれ、非イスラーム教徒にイスラーム教徒の生活への理解をもたらすことを目的とした。同書は広く受け入れられ、類書も多く出版された。内容としては、11の指針や、生活上のハラールとハラームなどが記されている。同書は、生活がイスラーム的であるか否かを考える上でのハンドブックになったが、先述のイスラームの伝統に反して、知識のない一般信徒が同書を指針に自身で判断することが批判された。マレーシアやインドネシアでは政府や民間のハラール認証機関があり、同書は『クルアーン』と同等に扱われているが、ハラールの認定に関しても、『クルアーン』と同じ権威を一機関に与えることになるので、中東では批判されている。イスラームの伝統法学では常に『クルアーン』に基づく具体的事案に対する判断が要請されるのであり、上記認証機関が世界各地で利用される飲食品や製品に対するファトワを独占することが懸念されている。食のハラールでマレーシアの認証があっても、中東では受け入れられ

ないケースも多々ある。

次に、阿部氏の発表がなされた。冒頭、阿部氏は、「利益を出すことは、それ自体が社会貢献の一種」だとして、産業振興の正当性を示した。続いて、ハラールビジネスの発生から展開、更に認証事業等の産業化に至る経緯を概述した。その際、日本のハラール事業支援の例を示したが、同時に、我が国の公益法人等によるハラール認証や、国・地方自治体によるハラール関連事業の問題点を指摘した。阿部氏は、日本においては、「宗教行為、若しくは当該宗教法人の目的に反しないハラール事業」（宗教法人等）、「宗教の教義を広め、儀式行事を行い、及び信者を教化育成することを主たる目的とするものでないハラール事業」（NPO法人等）、「宗教的意義をもたず、宗教に対する援助、助長、促進又は圧迫、干渉等の効果を及ぼさないハラール事業」（国、地方自治体等）など、ハラール事業について様々な概念が並存している状況であることを指摘した。

インバウンドビジネスに関して、「日本政府の観光ビジョン（2020年目標値、2030年目標値）」の数値目標の実現手段の1つとして、ハラールビジネスが期待されている一方、その運用面における課題も多い事を示した。その一例として、「平成26年度『スーパーグローバル大学創成支援事業』対象大学」の大学生協食堂のうち、関西圏の食堂事業におけるハラール対応への取り組み等を含めた調査経過が報告された。

最後に、アウトバウンドビジネスに関する例として、マレーシアが国家の強力な後ろ盾の下にハラール認証におけるハブ機関を目指していること、また、地域毎の平均月収の上昇率から、ムスリム人口が6割以上を占める同国全体においても、ハラールビジネスのターゲット層の所得が特に上昇している事が示された。また、既に現地で事業展開している日本企業のハラールビジネスの難点も指摘された。

（CISMOR 特別研究員 北村徹）



四戸潤弥氏



阿部泰士氏

シンポジウム

World Peace and Common Visions

(世界平和と共通イメージ)

主催： 世界イスラーム連盟 (RABITA)
日本ムスリム協会 (JMA)
同志社大学一神教学際研究センター (CISMOR)
共催： 同志社大学神学部・神学研究科

【日 時】 2017 年 8 月 5 日 (土) 10:00-18:00

【会 場】 同志社大学今出川キャンパス 良心館 1 階 RY107 教室

基調講演 “World Peace and Common Visions”

【講 師】 H. E. Muhammad bin Abdul Karim al-Issa

(世界イスラーム連盟総裁、前サウジアラビア政府法務大臣)

(代 理： Mhd. Monqith al-Sakkar (世界イスラーム連盟相談役))



Muhammad bin Abdul Karim
al-Issa 閣下



左から、
Muhammad bin Abdul Karim
al-Issa 閣下、圓月勝博氏



左から、
四戸潤弥氏、徳増公明氏、
Samir Nouh 氏

本シンポジウム開会に際し、先ず、圓月勝博氏 (同志社大学副学長)、Muhammad bin Abdul Karim al-Issa 閣下、徳増公明氏より、それぞれご挨拶があった。Issa 閣下 (通訳：四戸潤弥氏) は、世界イスラーム連盟の目的が「ムスリム或いはイスラームにとどまることなく人間という観点に立って教えを広めていくこと」「イスラームの意味 (国際社会と平和共存すること) をはっきりさせること」「政治や宗教、文化等の様々な分野を統合して世界平和や世界の諸民族との共存という立場に立っていること」「自分達が出来ることによって教育に関する助成など学問的に交流ができる環境の整備を推し進めること」等を強調した。そして、世界イスラーム連盟から同志社大学へ記念品が贈呈され、本シンポジウムは開幕した。

午前の研究会では、先ず、四戸潤弥氏より発表があり、サウジアラビア建国理念指導者ムハンマド・アブドルワッハの論考「3つの原則」の分析を通じて、信仰の深化を我々に教えたことを明らかにした。その中で、彼の強調点が一神教ではなく一神教を歪曲したシルクの否定にあり、それがイスラームの教えの根幹となることを示し、彼は過激派の始祖ではない、ということを理解する必要があることを強調した。

次に、徳増公明氏より発表があり、世界平和を脅かす諸々の行為を解決する方法について、経済利害の対立を超えた諸国家の国際協力が必要不可欠であること、そして、宗教学者や指導者が諸国民の良心の再生に向けて役割を果たすべきであることを主張し、また、紛争解決に向けた対話の前提条件として「平等な立場の保証」「誤解や騙しを含ませない明確な言葉」「忍耐と相手への敬意」「当事者双方の利益の実現」「紛争とその原因の正確な把握」を列挙した。

続いて、Samir Nouh 氏より発表があり、人類の安全保障と平和の実現に向けて、各研究分野に宗教へ回帰する必要性を呼びかけ、日本の大学に一般的なイスラームに政

教一致の概念があるという設定下の政治学研究の無意味さは、欧米社会のイスラーム理解からの脱却により解決されること、等を提唱した。

午後、Muhammad bin Abdul Karim al-Issa 閣下 (代理：Mhd. Monqith al-Sakkar 氏) (通訳：四戸潤弥氏) により基調講演が行われた。その内容は凡そ次の通りであった。

「人類の歴史はその誕生以来争いが続いているが、最も激しいのは宗教による闘争である」と云われているが、宗教は決して闘争を促進するものではなく、むしろ闘争に歯止めをかける役割を担っており、尚且つ、その教えは「人々に善き生活を送らせる」という基本的原則に沿っている。多くの大国が宗教を大義名分として戦争を起こしているが、よくよく視れば、その目的は植民地主義の野望や経済的利益であることが明白である。

新しい現象として「イスラーム嫌悪」という潮流が生まれ、欧州内外の多くの研究により、「イスラームは恐怖の宗教でありテロリズムの宗教である」と結論づけられている。ムスリムの中でもテロリズムに走る人がいることは事実だが、イスラームをしっかりと学んだ学者の中にテロリズムを正当化し支援する人はいない。その違いに気付いてほしい。イスラームに対する正しい知識が無いために、「イスラームはテロリズムの宗教」といった誤解が生じている。

イスラームの最大の特徴は「我 (神) は汝 (預言者ムハンマド) を全世界への慈悲として遣わした」にある。アッラーは預言者ムハンマドをアラブやムスリムだけに遣わしたわけではなく、全ての生けとし生けるものに対して遣わした、というのが我々の理解である。預言者の言葉には「人々の倫理道徳を完成させるためにイスラームというメッセージが送られてきた」とある。すなわち、人間の道徳的価値は預言者ムハンマド以降に生じ

研究会 第1セッション

“Deepening of understanding of teaching of Islam in times of Jihad”

【発表者】四戸潤弥（同志社大学神学部・神学研究科教授、一神教学際研究センター長）

“Shared Values and World Peace”

【発表者】徳増公明（日本ムスリム協会会長）

“Cultural Diversity And Cultural Enrichment:

Japanese Islamic Discourse and Call for Acculturation”

【発表者】Samir Nouh（拓殖大学シャリーア専門委員会シャリーア委員、同志社大学一神教学際研究センターリサーチフェロー）

研究会 第2セッション

“Human Security, Human Dignity and the Middle East:

Searching for Peaceful Cohabitation”

【発表者】中西久枝（同志社大学グローバル・スタディーズ研究科教授、一神教学際研究センター幹事）

“Shared Values and World Peace”

【発表者】趙錫麟（Ibrahim Chao）（元台湾駐サウジアラビア大使）

共同声明：世界イスラーム連盟、同志社大学

“Final Communiqué - Forum《World Peace ... Common Visions》”

【発表者】Sadok Mahfoudhi（世界イスラーム連盟通訳）

たものではなく、元々人間には本能として高貴なる倫理道徳が宿っており、人々がそれを理解し完成させる為に預言者が遣わされた、というものである。

人間には「やられたらやりかえす」という性質があり、キリスト教にある「右の頬を打たれたら左の頬を出せ」はイスラームでは受け入れられない。耐える方法もあるが、人間の本性に逆らって進めたところで何も実現できない。本性に合わせた中でよいもの考えるのがイスラームである。クルアーンには「自分に対して戦いを挑んできた者に対しては戦え」そして「敵対行為が無ければ、自ら敵対行為を示す事はよくない」という教えがある。

「イスラームは平和の宗教である」ということを強調したい。イスラームとサラーム（平和）は語源的に一緒に、イスラームと平和とは同じ意味である。科学的知識やアカデミックな知識で理解すれば、イスラームがテロリズムの宗教ではないということがお分かりいただける筈である。

基調講演後の研究会では、まず、中西久枝氏より発表があり、人々の安全保障が人間の尊厳を確保することにつながることを主張し、その例として、MENA（中東&北アフリカ）の急速な人口成長と人口流動性を指摘し、これらの移住者集団の社会形成が、MENA 地域のアラブ文化とムスリム社会ならびに地方経済に長期的かつ強力な影響を及ぼし続けていること、当地域の不安定さと長引く紛争の原因が必ずしも諸国家が覇権を求めているというだけではなく人間の不安定要因こそが真の原因であることを強調し、より平等でバランスの取れた地域にするためには、グローバルなパートナーシップが不可欠であることを強調した。

続いて、趙錫麟（Ibrahim Chao）氏（通訳：四戸潤弥氏）より発表があり、基調講演の通り、イスラームは全人類に与えられたメッセージであってそれを受入れることが正しいということ、道徳は人類の種の保存

の中で人々の行いを真っ直ぐな方向に向かわせる役割があること、特定の人種の上に自分達を立たせたいという考え方は侵略という形で現れること、等を主張した。また、世界平和と諸国民が持つ価値には、人類に共通する公平・自由・平等といったイスラーム的価値と共通性があることを強調した。

最後に、Sadok Mahfoudhi 氏により、世界イスラーム連盟と同志社大学との共同声明が発表され、本シンポジウムは幕を下ろした。

共同声明では、Muhammad bin Abdul Karim al-Issa 閣下が世界平和を達成するためのムスリムの熱意を強調して本セミナーを開催したことが紹介され、本セミナーの参加者に対し①イスラームを理解し、過激派の敵意に満ちた意見に惑わされず、テロ、暴力、殺人行為を糾弾すること、②宗教、特にイスラームは、過激派組織によるテロ、暴力、殺人行為に対して無実であること、③「イスラーム嫌悪」を完全に排除しなければならないこと、④宗教指導者は人間の文明を評価し、世界の平和を達成し、価値観を保ち、パートナーシップを強化するための橋渡しに協力するよう呼びかけること、⑤人間関係の促進、人権の擁護、人々の安全、繁栄、自由に対する権利を支援し、平和、正義、思いやり、相互尊重を規範とする世界のために協働すること、⑥環境を保全し、武器や大量破壊兵器から人間を守ることを目的とした国際協定を遵守すること、⑦移住および苦しんでいる人々に対して支援をおこなわれるよう、世界の国々に結束を促すよう呼びかけること、⑧学校及び家庭に崇高な宗教的価値を与え、人間の理想と道徳的倫理を損なおうとする者、家庭を傷つけようとする者に注意すること、⑨すべての信徒に積極的に社会的責任を果たし、社会に融合し、その発展に寄与すること、等が推奨事項として挙げられた。

（CISMOR 特別研究員 阿部泰士）



Mhd. Monqith al-Sakkar 氏



左から、
中西久枝氏、
趙錫麟（Ibrahim Chao）氏



Sadok Mahfoudhi 氏

2017 年度前半

活動報告

主催イベント

【国内開催】

2017 年 4 月 25 日 (火)

▼第 10 回 CISMOR セミナー

“Toyohiko Kagawa’s Concept of Religion: With a Focus on the Relationship between Religion & Science”

(賀川豊彦の宗教概念—宗教と科学の双方関係を中心に—)

講師：Stig Lindberg

(京都大学文学研究科

応用哲学・倫理学教育研究センター助教)

会場：同志社大学今出川キャンパス クラーク記念館 CL25 教室

2017 年 5 月 25 日 (木)

▼第 11 回 CISMOR セミナー

“Conservative Christians in Donald Trump's America”

(トランプ大統領のアメリカと保守的キリスト教)

講師：Gavin James Campbell

(同志社大学グローバル・スタディーズ研究科教授)

会場：同志社大学今出川キャンパス 良心館 RY410 教室

2017 年 6 月 16 日 (金)

▼第 1 回 イスラーム学研究会

“Fakhr al-Din al-Razi's Role in the Islamic Intellectual Tradition”

(ラーズィーのイスラーム神学における役割について)

講師：Tariq Jaffer

(アーモスト大学宗教学科准教授)

会場：同志社大学今出川キャンパス 良心館 RY434 教室

2017 年 7 月 18 日 (火)

▼第 2 回 イスラーム学研究会

①「ハラールとハラームについて」②「ハラールビジネスの現状」

講師：① 四戸潤弥 (同志社大学神学部・神学研究科教授、CISMOR センター長)

② 阿部泰士 (同志社大学 CISMOR 特別研究員)

会場：同志社大学今出川キャンパス 神学館 G31 教室

2017 年 8 月 5 日 (土)

▼国際シンポジウム

“World Peace and Common Visions”

(世界平和と共通イメージ)

講師 (基調講演)：H. E. Muhammad bin Abdul Karim al-Issa (RABITA 総裁)

(代理：Mhd. Monqith al-Sakkar (RABITA))

発表者 (研究会)：四戸潤弥 (同志社)、徳増公明 (JMA)、Samir Nouh (CISMOR)、中西久枝 (同志社)、趙錫麟 (元台湾駐サウジアラビア大使)

発表者 (共同声明)：Sadok Mahfoudhi (RABITA)

会場：同志社大学今出川キャンパス 良心館 RY107 教室

共催：同志社大学神学部・神学研究科

共催イベント

【国内開催】

2017 年 5 月 20 日 (土)

▼公開講演会

“Images of Jerusalem:

Ancient Perspectives and Eternal Problems ”

(エルサレムのイメージ：古代の視座と永遠の課題)

講師：David Satran

(エルサレム ヘブライ大学比較宗教学科学科長)

会場：同志社大学今出川キャンパス 神学館チャペル

2017 年 7 月 15 日 (土)

▼公開講演会

“Iran-US Relations and the Gulf Politics”

(イラン・アメリカ関係と湾岸政治)

講師：Arshin Adib-Moghaddam

(ロンドン大学 SOAS 政治国際研究学部教授、イラン研究所所長)

会場：同志社大学烏丸キャンパス 志高館 SK214 教室

お知らせ

CISMOR の出版物である『一神教学際研究 (JISMOR)』と『一神教世界 (WMR)』は、電子版の需要に鑑みて、かねてより機関リポジトリの導入や当研究センターウェブサイトでの PDF ファイル公開などによる電子版への移行を進めてきました。これらの出版物の公開につきましては、電子版のみの発行となります。

CISMOR 最新情報を発信中です

<http://www.cismor.jp>

CISMOR ウェブサイトより、最新情報を発信しています。出版物をはじめ、過去の講演会の動画、ニュースをご覧ください。

発行	同志社大学一神教学際研究センター (CISMOR)	TEL 075-251-3726	FAX 075-251-3092
	〒602-8580 京都市上京区今出川烏丸通東入	E-mail	rc-issn@mail.doshisha.ac.jp
編集	CISMOR 事務局編集部		